

論文要旨

学位論文題目 「近代日本服飾とモードの関係をめぐる歴史的研究」

氏名 安城 寿子

本稿は、近代の日本服飾とモードの関係を明らかにしようとするものである。本稿で言うモードとは、定期的に更新されるめまぐるしい変化をともなう服飾の変化のことだが、洋服の場合、18世紀中頃までに、その文化的中心としてパリが不動の地位を確立しており、それゆえ、日本においても、服飾とモードの関係という主題は、洋服が普及を見せるほど、パリ・モードの受容の問題と不可分のものとなった。

本稿の議論は、以下のような二つの問題意識に基づいている。第一に、日本服飾とモードの関係をめぐっては、いくつかの断片的な先行研究があるが、そこでは、戦前・戦後がともに視野に収められてはならず、その歴史を戦前から戦後への連続性のもとに明らかにする必要がある。第二に、パリ・コレクションにおける日本人の活躍は、もっぱら、西洋服飾史の文脈で語られてきたが、そこでは、彼らのデザインが着物の「伝統」を具現するものであるということが強調されるばかりで、着物が漠然と過去という時間に固定されてしまっている。そのことに対する疑問から、本稿では、近代において、着物もまた、新たに見出され、生まれ変わることを繰り返してきたという事実と断絶させることなく、近代の日本服飾とモードの関係の歴史を記述することを試みた。

第一部では、百貨店や消費文化に関する先行研究を踏まえながら、1900年代までの日本において、着物版モードと言うべきものが誕生を見ていたということを論じた。それは、着物をめぐるモードであったがゆえに、未だ、西洋からもたらされる洋服のモードの影響を受けることはなかったが、この時、モードをモードとして生み出すシステムが整えられ、その後、洋服をめぐってもこの同じシステムが活用されたということは非常に重要である。さらに、着物版モードの特徴としては、そこにおいて、「復古趣味」と「洋風」という二つの傾向が交互に立ち現れては循環させられていたということを指摘することができる。これら二つの傾向は一見対立するように見えるものだが、いずれも、「新しさ」の表象としての意味を与えられモードとして発信されていったのである。

第二部では、1933年刊行の『新女性の洋装』と1943年刊行の『創意と衣服』という田中千代の二冊の著書に注目し、そこにおいて、既に、同時代の西洋からもたらされるモードを参照しつつ洋服のデザインを行うための具体的な方法論が説かれていたということを明らかにした。特に重要なことは、田中が、洋服をデザインすることすなわちデザイナーの「オリジナリティ」の表現であるとの考えに基づき、そうした「オリジナリティ」の表現の理想的なモデルとしてパリ・モードを位置付けていたこと、そして、刊行時期に十年の開きがある二冊の著書を比較した時、そこに、西洋からもたらされるモードを踏まえて洋服のデザインを行うための方法論をめぐる研究の深化の跡が見られるということであ

る。さらに、『新女性の洋装』において、「オリジナリティ」の表現の方法の一つとして、洋服のデザインに着物の生地を用いた「日本趣味の表現」が提案されていたことも見落とされるべきでない。

第三部では、斎藤佳三という人物に注目し、彼が 1910 年代から敗戦直後にかけて試みた着物でも洋服でもないオルターナティブの創造をめぐる議論を通じて、非常に特異な形で生み出されようとしていた日本独自のモードの可能性を明らかにした。斎藤は、服装改善運動や婦人標準服など、国家の文化的政策としての色合いの強い服飾改良の試みに携わった人物として知られているが、一方で、1922 年の「天平式」や 1947 年の「社交服」のようなオルターナティブの創造を個人的なデザインの実践として試みており、それらは、その発想や形式において、近代を通じて繰り返し試みられてきた改良服にも通じるところがある。改良服の試みというものはモードと全く接点のないところで展開されてきたと考えられがちだが、1935 年、斎藤は、そうしたオルターナティブを日本独自のモードとして発信すべく「流行考査所」なる機関を設けており、そこには、改良服と通底する部分を持ちながら、同時に、モードとして生み出されようとしたオルターナティブという非常に特異な服飾の一つの可能性を見ることができる。

第四部では、まず、1950 年代におけるクリスチャン・ディオールという経験の詳細を明らかにし、さらに、ディオールに象徴されるパリ・モードに対する「抵抗」として日本独自のモードを生み出そうとする AD センター・ファッション・グループの試みについて述べた上で、AD グループのメンバーでもあった中村乃武夫が 1960 年に日本人として初めてパリでショーを発表するまでを見届けた。1950 年代の日本では、洋裁ブームと軌を一にして、ディオールの手がけるラインが受容されていったが、そうしたラインの研究を通じて、新しい洋服のデザインに必要な様々な表現語彙が蓄積されていったのは確かである。そして、AD グループの試みですら、新しいラインの創造によって日本独自のモードを生み出そうとする点において、ディオールの試みをなぞるものであり、逆説的な形ではあれ、ディオールを一つのモデルとしてモードと洋服のデザインの研究が深められる機会であったと言える。さらに、1960 年に中村乃武夫がパリで発表したのは着物的な意匠を散りばめたショーだったが、それもまた、先立つ 1950 年代にもたらされたパリ・モードをめぐる情報を通じ、中村が、「西洋」という眼差しの主体に着物的な意匠がどれほど有効に訴えかけるものであるかを学習していたからこそ実現されたものであった。

以上の議論から明らかになるのは、次のような日本服飾とモードの関係の歴史である。まず、1900 年代までに、着物をめぐってモードのシステムが整えられ、次に、1920 年代末から 30 年代にかけて、そのシステムに基づいて洋服のモードが生み出されようとした時、同時代の西洋からもたらされるモードを踏まえた洋服のデザインの方法論が説かれるようになり、さらに、戦後、1950 年代には、クリスチャン・ディオールという経験を通じて、戦前に既に存在していた「オリジナリティ」とパリ・モードの模倣をめぐる言説がより具体的なイメージをともなって立ち現れるようになった。この時見落とされるべきでないのは、こうした歴史の中で、繰り返し、着物的な意匠を服飾のデザインに取り入れることが意識的に試みられてきたということだ。すなわち、着物もまた、身近なものとして顧みられながら、それ自身モードのとの関わりの中で変化を繰り返してきたものに他ならないのである。